戦う書記官！

Three　Liar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
戦う書記官！

【Ｎコード】
Ｎ６６７７Ｕ

【作者名】
Ｔｈｒｅｅ　Ｌｉａｒ

【あらすじ】
帝政ロシアの書記官アレクサンドル。男としてバリバリに働いていた彼女だが、腐れ縁マブダチのアレクセイ・グリゴリー・ダーシュコワ夫人に女であることがばれてしまった！
他にもモスクワの魔法使いとかオスマン帝国陸軍大将とか、いろんな男に言い寄られてアレクサンドルの日常はどうなってしまうのか！？

はじまりはじまり

戦う書記官！
ロシア人のロシア人によるロシア人のためのラブコメ

プロローグ
ここはサンクトペテルブルク。春は緑が爆発したように芽吹く。その中、エルミタージュ宮殿では晩餐会が催されていた。金に光り輝く色とりどりの宝石、そして美しく着飾った至高の宝、つまり女たち。
だが、美しく着飾ることを自らの意思でやめた者もいる。女の幸せよりも国家の安泰のために尽力した女傑。男装の麗人、アレクサンドル・ペリンスキーがこの物語の主人公である。

「グリゴリー、今度のクーデターに際して、よくぞ兵を動かしてくれましたね」
「ま、エカチェリーナ陛下とお前のためだ」
グリゴリーと呼ばれた男は、さらさらの金髪をけだるく掻きあげながら一つ欠伸した。
「アレクセイ、その後、ピョートルは？」
「ガッチナに幽閉して、後腐れなく殺しました」
アレクセイと呼ばれた男は何の気負いもなくさらりと事務的に答えただけだった。
「ダーシュコワ夫人、このことはくれぐれも内密に」
「よろしくてよ？」
私は悠然と微笑む貴婦人を見つめ返した。微笑が漏れる。

「エカチェリーナ陛下に万歳！」
部屋にいた四人は小さな声で、笑いながら「万歳」と唱えた。

アレクサンドル・ペリンスキーの人生は生半可なものではなかった。とある村に生まれたが、生後すぐに売られた。だから両親の顔など知らない。貴族の家で育てられたものの、虐待がもとで家を飛び出しサンクトペテルブルクまでやってきた。
偉くなりたい、金に困りたくない。それだけが願いだった。その時出会ったのがエカチェリーナ皇后、つまりエカチェリーナ二世陛下だ。
陛下はアレクサンドルに非常によくした。貴族の家にいたので、読み書きそろばんは出来ていた。陛下はアレクサンドルに伝授できるもの全てを伝授した。
こうして、平民出身の書記官は誕生したのである。

「さて、私もそろそろ晩餐会に出席しないと…」
宮殿内の自室で正装に着替え、最後のチェックに鏡を見た。書記官の黒い上着に黒いベスト、黒い半ズボンと靴下。最後に黒い三角帽をこじゃれた風に被れば「アレクサンドル・ペリンスキー女帝陛下お付き書記官」の完成だ。
鏡の姿に満足した彼女は、急いで晩餐会の催されている聖ワシーリーの間に向かった。
廊下に衛兵が等間隔で立っている。そのみな誰もがアレクサンドルに敬礼していく。この男装、まだ誰にも見破られてないのが自慢だ。
「アレクサンドル・ペリンスキー様のご到着！」
聖ワシーリーの広間につくと、紋章官が嫌悪を隠そうともせずに睨んできた。アレクサンドルの平民の出自が気に入らないというわ

けだ。だがそれを気にも留めず、すたすたと赤じゅうたんの上を歩き、既に上座でくつろいでいるエカチェリーナ陛下の前で片膝をついて臣下の礼をとった。会場にいる全ての者が、声一つ立てずにことの様子を窺っている。

やがて、エカチェリーナ陛下が口を開いた。

「御苦労をかけましたね、ペリンスキー書記官。今日はわたくしの戴冠の日でした。疲れたでしょう？ゆっくり楽しんでいって頂戴」

「身に余るお言葉にございます。こたびの戴冠、まことにめでたき吉兆、これからロシア帝国がさらなる発展を遂げる吉兆にございます」

エカチェリーナ陛下は笑う口元を扇子で隠した。それを合図にアレクサンドルは立ち上がり、自分の席に着いた。

しかし、そこも居心地のいいものではなかった。低能の貴族たちが、平民出身のアレクサンドルを噂し、尾ひれ背びれをつけて隣の席へ耳打ちする。アレクサンドルはそんなことなど気にも留めず、ただ無表情で席に座っていた。

賓客全員が集まり、晩餐会がスタートした。ヤマウズラのステーキ、金箔を振りかけたサラダ、年代物のワイン。さらにすばらしい料理がどんどんテーブルに運ばれてくる。

だがアレクサンドルは調子が悪かった。腹部が痛んで食事どころではなかったのだ。賓客が盛り上がっている中、アレクサンドルはそっと広間を抜け出した。

向かった先はトイレだ。真っ暗やみの中、蜀台のローソク一本で歩いていく。やっとトイレに着いた。蜀台を床に置き、トイレへ入る。ズボンを下ろすと、やはりそこには女性の証である赤い血がついていた。

「…くそ」

とりあえず風呂で洗い流したい。そう思いながらトイレの扉を開けると、目の前に立っていたのはダーシュコワ夫人！

「アレクサンドル、どうかなさったの？」

「いえ、何でも」
アレクサンドルは逃げるようにその場を去った。
が。
悪夢というものは時に現実のものとなる。

が。
悪夢というものは時に現実のものとなる。

次の日、アレクサンドルは宮殿の一室で着替えをしていた。上着を脱ぎ、ベストを外し、シャツだけの姿で鏡の前に立った。
彼女の祖先はどうやらヴァイキングらしい。鋼のような銀の髪がさらさらとアレクサンドルの輪郭を縁取って、芸術作品そのものだ。
と。そのとき。
「ズドラーストヴィチェっ！ハローアレクサンドル…ってあれ？」
「きゃあっ！」
ドアを開けて飛びついてきたのはグリゴリー！
「胸をもむなぁ！」
回し蹴りを華麗に避け、グリゴリーは驚きつつも鼻の下をのばしきっただらしない顔でにやりと笑った。
「アレクサンドル、実は女の子だったでしょ？むにむにふわふわして、気持ちよかったぜ？」
「失せろ！！」
花瓶を投げた瞬間、グリゴリーはドアから逃げた。
アレクサンドルは茫然として青ざめたままだった。口に締まりのないグリゴリーのことだ、まずこのことを出会う人全員に喋りまくる。無論、弟のアレクセイにもだ。ダーシュコワ夫人？既に知っているに決まっている。女をナメてはいけない。
と、いうことは。
「待てぇぇぇぇぇグリゴリィィィィィ！！！！」

アレクサンドルは足もあらわに、宮殿内を疾走した。

三日後。

「アレクサンドル、…私の至宝。なんてことをしでかしたのかしら？」

「ももももも申し訳ありませんでしたッッ！！！」

アレクサンドルはエカチェリーナ2世陛下に平謝りしていた。それを見てため息をつく陛下。

「アレクサンドル、この権力渦巻く宮廷で、あなたが女だとばれたらどんなことが起きると思うの？」

「何が…ですか？」

陛下は頭を押さえ、首を横に振った。

「まるでわかってないのね…。周りの貴族は『陛下の信頼篤いレディ』という目であなたを見るでしょう。ましてやあなたは独身！権力欲しさに近づいてくるオオカミさんがうようようするわよ！」

「え、でも私、結婚する気ないですから」

「それでも！男は羊の皮を被ったオオカミなのよ！」

それから私は自室へ戻り、クローゼットを開けた。見事に男物の服しかない。そのことに何かの安心感を得られてうれしかった私は、宮殿の蔵書室に向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6677u/

戦う書記官！

2011年11月6日03時12分発行